

U が M の座標近傍で座標系 (x_1, x_2, \dots, x_m) が付随している場合には, U 上のベクトル場 X は

$$(2.74) \quad X = \xi_1 \frac{\partial}{\partial x_1} + \xi_2 \frac{\partial}{\partial x_2} + \dots + \xi_m \frac{\partial}{\partial x_m}$$

と表される. ξ_1, \dots, ξ_m は U 上の関数である. 式 (2.74) の意味は, X が, U の各点 p に、接ベクトル

$$\xi_1(p) \left(\frac{\partial}{\partial x_1} \right)_p + \xi_2(p) \left(\frac{\partial}{\partial x_2} \right)_p + \dots + \xi_m(p) \left(\frac{\partial}{\partial x_m} \right)_p$$

を対応させるベクトル場であるという意味である. ここに出てきた関数 ξ_1, \dots, ξ_m がすべて C^∞ 級
のとき, X は U 上の C^∞ 級ベクトル場であるという. また M 上のベクトル場が C^∞ 級である
とは, それらがすべての座標近傍上で C^∞ 級であることである.

例 2.28 f を座標近傍 U 上の関数とする. U に付随した座標系を (x_1, \dots, x_m) として,
 U 上のベクトル場 X を

$$(2.75) \quad Xf = \frac{\partial f}{\partial x_1} \frac{\partial}{\partial x_1} + \dots + \frac{\partial f}{\partial x_m} \frac{\partial}{\partial x_m}$$

と定義する. ベクトル場の係数の関数を ξ_i として, $\frac{\partial f}{\partial x_i}$ を選んだ場合である. ベクトル
場 Xf を関数 f の勾配ベクトル場 (gradient vector field) という. \square

ベクトル場は各点で「接ベクトル」という形の微分操作を与えているから, それ自身一種の
微分作用素である. ここで定義した勾配ベクトル場 Xf で f を微分してみよう.

$$(2.76) \quad \begin{aligned} Xf \cdot f &= \left(\sum_{i=1}^m \frac{\partial f}{\partial x_i} \frac{\partial}{\partial x_i} \right) \cdot f \\ &= \sum_{i=1}^m \left(\frac{\partial f}{\partial x_i} \right)^2 \geq 0. \end{aligned}$$

得られた関数 $Xf \cdot f$ の値 $(Xf \cdot f)(p)$ は

$$\frac{\partial f}{\partial x_1}(p) = \dots = \frac{\partial f}{\partial x_i}(p) = \dots = \frac{\partial f}{\partial x_m}(p) = 0$$

でない限り, (すなわち, p が f の臨界点でない限り) $Xf \cdot f > 0$ である. 言い換えれば,
 f の勾配ベクトル場は, f の臨界点以外の点においては, f の増加する方向を向い
ているということがわかる.

f が Morse 型の標準形

$$(2.77) \quad f = -x_1^2 - \dots - x_\lambda^2 + x_{\lambda+1}^2 + \dots + x_m^2$$

の場合の勾配ベクトル場が図 2.12 に示されている